［中央大学］

# 「惜別の歌」　人と時代と

**奥平 晋**　中央大学広報室大学史資料課嘱託職員　同法学部兼任講師

「遠き別れに　耐えかねて」の一節に始まる「惜別の歌」は、中央大学の学生歌の一つである。

本稿では、誕生の経緯と時代背景、関係人物に光をあて、卒業式等の場で現在に歌い継がれるこの歌を紹介する。

「惜別の歌」は、島崎藤村の第一詩集『若菜集』（1897年）収載の「高楼（たかどの）」を原詩とする。姉妹対詠による八連の詩では、別離の情が藤村の紡ぎ出す抒情的世界の中で語られる。青春の詩集ともいうべき本作の刊行時、藤村は25歳だった。

この藤村の詩に曲が付され「惜別の歌」となる。作曲は本学予科在籍の藤江英輔（1950年法学部卒）。曲作りを志した1945年初頭、既に兵役猶予の特権は学生には無く、藤江自身も学徒勤労動員により板橋の陸軍造兵廠に配属されていた。

仕事の一つは、届いた赤紙（召集令状）を該当する学徒に渡すこと。この心痛む行為と向き合う中で、軍歌とは違う、本当の思いを託せる曲作りを思い立つ。その起源が藤村の「高楼」にあった。

藤江は、原詩から四連を抽出し、第一連「かなしむなかれ　わがあねよ」を「―わが友よ」と読み替え、曲名を「惜別の歌」と定めた。歌は、やがて造兵廠に働く若者達に静かに広く浸透する。死出の旅に発つ友を送る歌ながら、同時に自分にも「死」が迫ることを言い聞かせる歌でもあっ

中央大学出陣予科生の壮行会（1943年）

たことを、晩年の藤江は語っている。

戦後、「惜別の歌」にはレコード化の動きがあった。中央大学音楽研究会(男声合唱団)が企画し、学生課職員が藤江を訪ねたのが1956年夏。問題は一番の改作(―わが友よ)と作品名の改変。原詩の著作権継承者より許諾を得る必要があった。しかし、藤村の三男で著作権者の一人である島崎蓊助氏と藤江に親交があり、問題は解決。SP盤レコードの製作に至る。また、1950年代に入ると、「うたごえ喫茶」の隆盛により「惜別の歌」のリクエストが増え、プロ歌手によるレコード発売の話が持ち上がる。実際に発売された楽曲は三番までの歌詞ながら、支持を得て「惜別の歌」は一躍知名度が上がった。

その後、大学紛争が高揚する中、最終講義の場でスポットがあたった。中央大学教授の猪間驥一(いのま きいち)が、演題「中央大学校歌と『惜別の歌』の由来」(1966年12月1日)において、作品誕生の時代に即して歌を味わう必要性を語り、また「いかなる圧抑の下にあっても、青春の芽生えは健やかに育つことを信ずる」ことを強調した。加えて、欧州留学の見聞から大学の戦争犠牲者の記念碑を例に、中央大学には像も碑銘も無いが「惜別の歌」がある意味を説いた。満洲引き揚げを体験した猪間の語りは、かつての出陣学徒と同世代の若者に向けて、歌に込められた意味を再び呼び起こすメッセージともなった。

「惜別の歌」は、藤村が紡ぎ出す清冽な表現と、藤江英輔が編んだ哀切極まりないメロディにより、学内外で共感を呼び、愛唱された。しかし、その来歴を知る者は少ない。1996年5月、藤村ゆかりの小諸義塾跡地(長野県)に記念碑が建った。碑誌には藤江自身の揮毫(きごう)により「藤村詩の顕彰と、この歌に送られて再び帰らなかった出陣学徒の鎮魂を祈念して。」と刻まれた。

戦時下、若い動員学徒たちの間で死と隣り合わせの苦悩と煩悶の中歌われた曲は、いま自由と平和の時代にあって、別離の時を共有し、未来へ向けて互いの絆を確かめ合う契機となった。時代は変われど、「惜別の歌」は現代になお、生き続けるのである。

「惜別の歌」SP盤レコード(1956年10月)

［専修大学］

# 校歌に込めた大学アイデンティティー

瀬戸口 龍一　専修大学大学史資料室長

## 1　なぜ校歌をつくるのか？

公立の小中学校を中心に、校歌が普及していくのは明治中期以降のことである。なぜ校歌をつくるのか。それは校歌の斉唱を通して、生徒たちに自校の教育方針を強く印象づけるため、そしてその地域へ愛着を抱かせるためであったと言われている。そのため、その歌詞には道徳的内容はもちろん、校訓や、地域の山野河海の風景が、謳（うた）われていることが多い。

一方、私立大学における校歌はどうであろうか。明治後期から昭和初期にかけて、多くの私立大学で校歌が制定されていく。歌詞だけを見ると、校訓にあたる「建学の精神」が盛り込まれ、公立の小中学校とあまり差異はないように見える。本当にそうであろうか。本稿では、専修大学の校歌制定の事例を紹介することで、私立大学における校歌制定の意義を探ることとしたい。

## 2　校歌に対する大学側の要望

儀式用と応援用の2つの専修大学校歌が誕生したのは1926（大正15）年1月のことである。専修大学には、当時の理事・鶴岡伊作から、歌詞を担当した東京音楽学校（現・東京藝術大学音楽学部）教授・高野辰之に宛てた手紙が残っており、そこからは大学当局の校歌に対する要望を見ることができる。歌詞制作において、鶴岡が最も重要視したのが、儀式用には学校の所在地が分かる言葉を使うこと、応援用には外部への宣伝を目的の一つとしているために校名を入れること、この2点であった。

専修大学の校歌は「宮城の北、枢地に立ちて」という歌詞で始まる。専修大学は皇居の北という崇高な場所に建っているという意味であるが、先行して校歌を制定した早稲田大学も明治大学も学校の所在地が分かるような

言葉を冒頭に配しているので、それを踏襲したのだろう。

校名の挿入については、今では当然のことと思われるかもしれないが、実はこの時期の公立の小中学校の校歌に校名はほとんど入っていない。なぜなら小中学校の校歌は儀式で歌われることが多く、参列者にとって校名は周知の事実であり、歌詞に入れる必要がなかったためである。

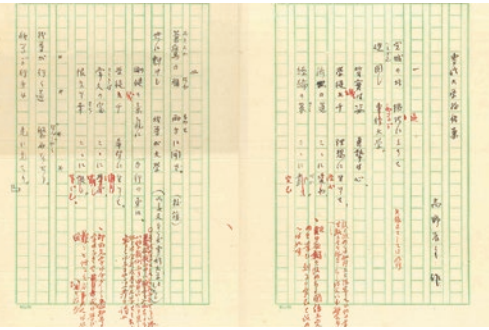
ではなぜ、専修大学は校歌に学校所在地と校名を入れることを強く求めたのか。そこに私立大学特有の校歌制定の意義を見ることができる。

## 3　競い合う私立大学

私立大学における校歌制定期は、大学スポーツの隆盛期とちょうど重なる。早稲田大学と慶應義塾大学との対抗戦に端を発して始まった東京六大学野球は、大正末期になると、六つの大学が出そろい、大人気を博すようになる。その人気にあやかるかのように、1931（昭和6）年、専修・中央・日本の3大学が中心となって、現在の東都大学野球の前身である五大学野球連盟を発足させる。これらの対抗戦の様子は新聞紙上をにぎわし、ラジオでは全国中継され、世間の大きな注目を集めた。

さらに、1918（大正7）年の「大学令」の公布により、多くの私立学校が「大学」へと昇格を果たす一方で、旧制高校や官立の旧制専門学校が全国各地で設立され、若者たちの高等教育機関への進学率が高まっていく。学生募集を目的とした大学間競争の始まりである。

私立大学が競い合う時代の到来により、各大学はあの手この手で自らの存在を世間にアピールせざるを得なくなる。専修大学が、宣伝のために校歌をつくり、聞くだけで、校名、所在地、建学の精神が分かるようにしたのも、その一つである。私立大学の校歌は儀式のためだけではなく、外部へ発信するための各大学のアイデンティティーが込められているのである。



高野自筆の専修大学校歌。鶴岡の手による推敲の跡が見える。

［昭和女子大学］

# 学生主体で創る 心を結ぶ学園の歌

大久保 英男　昭和女子大学昭和リエゾンセンター係長

## 1 スクール・ソングと学園

学校法人昭和女子大学（前身は「日本女子高等学院」）は、1920年、詩人人見東明（圓吉）により設立された。創立者の詩「開講の詞」が建学の精神にあたる。

その後圓吉の遺志を継ぎ、二代目理事長に就任した人見楠郎は、中高部の生徒に配布される「学園歌集」の巻頭言に、次のような言葉を残している。

「学友と肩を組みながら学生道にいそしむときも、ひとり静かに瞑想するときにも、（中略）お互いの心を結ぶことのできるメロディーを唇に響かせ合うことは、どんなにか楽しいものであろう。（中略）学園で生まれたスクール・ソングが土台となって、年々さらに多くの学園歌が誕生してほしいものである」

音楽が学生の心の拠り所となることを願った楠郎は、学園内に「カリヨン」と呼ばれる鐘を設置。今もなお、スクール・ソングや四季折々の曲を、一日に数回涼やかに奏で、学園の日常を彩っている。

## 2 プロジェクトの発足と活動

前述のような先人の思いを背景に、2018年、職員5名の提案により、創立100周年事業「学園イメージソングプロジェクト」が発足した。プロジェクトの目標は、「学園の一体感を醸成する音楽を作り、学園に集う人々の心を結ぶこと」。こども園から大学院、またブリティッシュ・スクール・イン・トウキョウ昭和やテンプル大学ジャパンキャンパスを同じ敷地内に擁する本学で、世代や属性の垣根を越えて心を寄せ合えるツールを創ろうという思いが、根幹にあった。

作曲は、MISIAの「Everything」など、数々の大ヒット曲を世に送り出した作曲家・ピアニストの松本俊明氏に

依頼。美しく、希望を感じさせるメロディーが誕生した。

また、本プロジェクトには有志の大学生10名が参加。その学生が中心となって歌詞を全学に募集し、集まった多数の作品を少しずつつなぎ合わせて詞を完成させた。昭和学園に所属する者にとってなじみ深い言葉や、緑豊かなキャンパスの描写を散りばめ、自らの夢をかなえようと前向きに歩む若者の姿を想起させる歌詞となった。

学生たちが悩みに悩んでつけた楽曲のタイトルは、「For Our Dreams」。彼女たちの「今」と「これから」が、その一言に集約された。

## 3　絆の象徴としての歌

こうして完成した学園イメージソングは、２０１９年11月に開催された学園祭にて初めて披露された（写真）。

その後、アカペラサークルの学生の協力を得て歌のレコーディングを行ったほか、２０２０年以降はミュージックビデオやＣＤ制作に着手している。

新型コロナウイルスの感染が拡大した２０２０年５月には、この楽曲を使用した「オンライン合唱」企画にも挑戦。学内外に公開した動画は大きな反響を呼んだ。

さらに、この楽曲を前述の「カリヨン」の鐘に使用することが決定。２０２０年夏以降、「For Our Dreams」は、かつて人見楠郎が望んだように、「心を結ぶメロディー」となってキャンパスに響き渡る。

最後に、学生たちが、編纂（さん）した歌詞の中から、次の一節を紹介しよう。

「あふれだした夢と七色の輝きで　行き先の地図を描き出そう　そして私らしく笑顔で未来へ進もう　Be a light to the world　次の舞台へ」

昭和学園の絆の象徴となるであろうこの楽曲は、未来にわたってそれぞれの時代を生きる学生たちを励まし、夢の輝きにあふれた次の舞台へ導いていくことだろう。

「For Our Dreams」はこちらからお聴きいただけます。
作詞：昭和学園一同　作曲：松本 俊明